

敗北との向き合い方

勝負への視点

糸谷哲郎

itodani tetsuro

将棋棋士は、最も「敗北」する職業のうちのひとつだ。平均的な将棋棋士は、年間およそ三十〜五十局の対局を行う。今最も勝っている将棋棋士と言える藤井聡太七段でさえ、昨年度成績は四十五勝八敗である。もちろんトップクラスに勝っているのだが、それでも年間八敗を喫している。半分〜四割程度の対局を負ける将棋棋士は、一年に十五〜二十敗前後を喫することとなる（参考として筆者の昨年度成績は、二十勝十七敗であり、本年度を除いて九〜二十敗の範疇に収まっている）。個人がこれだけ一年に「敗北」を突きつけられることは、なかなか他の職業では考えられないように思われる。

このように、職業上どうしても「敗北」を多く経験することとなる将棋棋士は、「敗北



との向き合い方」に関しても多くの教訓を残してきた。現在、将棋界の歴史において通算対局数一位にして通算最多敗（一三二四勝一一八〇敗）を記録している加藤一二三九段は、敗北数が多いのは決して恥ではなく、むしろ第一線で活躍してきた証なのだと誇る（『老いと勝負と信仰と』、株式会社ワニブックス、二〇一一）。将棋界では、多くの棋戦が一次予選や二次予選ではトーナメント形式であり、一敗するとその棋戦から敗退してしまう形式が多い。対して、それらの予選を勝ち抜くかシードによって本戦に出場できたならばリーグ戦や二敗失格形式、さらに上のタイトル戦へと進出できたならば五番勝負や七番勝負という対戦形式になるため、多く敗北することが（もちろんそれを目指すわけではないが）可能となる。よって、その年に通常の棋士より多くの敗北を喫する将棋棋士は、一次予選や二次予選で敗れるのではなく、一次予選や二次予選を勝ち抜いたうえ、もしくはシードに値する実績を多く上げているために、リーグ戦やタイトル戦に数多く出た棋士だということが言える。敗数が多いことは、その将棋棋士が多く負けていて弱いということを示すのではなく、むしろ、リーグ戦やタイトル戦まで勝ち残っている第一線で長く成績を残し続けてきた棋士だと証明しているのである。

さて、加藤九段は果たして敗北との向き合い方に関してどのように考えているのだろうか。加藤九段はこれまで対局を常に真剣に指しており、それゆえに負けを引きずることはない、そして負けから「学ぶ」ことが重要であると説く（前掲書）。「真剣」というのは加藤九段によって非常に強調されている言葉である。真剣に考え続けることが、すなわち真理を求め続けることであり、もちろん将棋だけでなく何事に対しても真剣に向かうことこそが正しい結果を求めるために必要なことだ、と説かれている。さらには、真剣に向かったうえで「負け」は成功の母であり、負けたことを糧にして改良することにより次の勝利を目指す、すなわち「負け」を反省することによって、これまでわかつてなかったことをわかるようにすることこそが大切であるのだと述べられている。ここにはおそらく長年将棋界で重要視されてきた「感想戦」の意義を引き継ぐ要素も多分に含まれている。「感想戦」は勝者と敗者が共に指してきた一局の将棋を検討し、お互いにどこが間違っていたかを検討するものだ。終わった勝負をただそのままにするのではなく、その次の対局時までお互いを高め合うための局後の儀式である。この「感想戦」では、敗者勝者を問わずどこで悪手を指したのかということが主に検討される。ここ数年では局後に自らの将棋

を、将棋ソフトによる評価値による検討という形で人間の直感や感想よりも、多くの場合でより正しく評価できるため、「感想戦」の成長に関わる重要度の比重も低下してきたが、昔の将棋界においては自らの悪手や他者の意見を取り入れる、またとない機会だったと言える。

加藤九段の見解から得られることは、敗北をただ敗北としてとらえるのではなく、更なる成長に繋げるために敗北を解析することこそが敗北を乗り越えるべき方法であるということだろう。その乗り越えるための中核となっている行為は、もちろん勝負に全力を尽くすことであり、全力を尽くせばすなわち敗北も学びに繋がる。すなわち敗北と向き合うためにはまず真剣に勝負に向かい続けることである。そうすることによって、負けの悔しさを軽減し次の勝負へと生かすことができる。

昭和の名棋士であり、加藤九段に多大な影響を与えたとされる升田幸三実力制第四代名人は、「勝負」と「ばくち」を比較し、勝負を行う勝負師は最後まで勝負を諦めないもの、かつての忍者のように武器が折れても生きている限り抵抗し、挽回を図るものであると述べた（『勝負、人生は日々これ戦場』、サンケイ新聞社刊、一九七〇〔文庫版「勝負」、中央公論新社刊、二〇〇二〕）。ここには、勝

負に全力を尽くすことの大切さが説かれているとともに将棋が単なる「ばくち」と一緒にされてはたまらないという考えもあるように見える。当時はまだまだ将棋が伝統遊戯としての社会的地位を確立していなかったこともあり、将棋の価値を高める必要もあつたのだろう。将棋が単なる勝ち負けだけではなく、その勝利に意味が付与されるためには、その将棋が終了するまでの過程が価値を持つことが重要である。そしてその価値とは、対局者が将棋を真剣に考え、その上で勝負するところにある。単なる賭け事とは過程からして違う、真剣な、勝負を諦めない思考こそが将棋の対局を価値あるものたらしめていると言える。

また、升田実力制第四代名人のライバルであり、長らく将棋界に君臨した大山康晴十五世名人は、「転んでも、ただでは起きない」ということわざに着目し、このあまりよくない意味に使われがちなことわざこそが将棋棋士の伝統である「負けて強くなれ」と言った教えに繋がると言う（『勝負強さの人間学』、PHP研究所、一九八三）。「負けて強くなれ」は、勝局よりも敗局のほうが反省材料を多く含むことから、修業時代はどのような手を使っても勝つというスタイルよりも、自らの将棋を追い求め、結果として負けたとしてもそれを糧として成長すればよいという教え

である。「転び負け」は、一時においてはよくないことであるが、これを成長に繋げ、次の勝ちに結びつけられることを重視していたのだ。筆者の修業時代にも聞き覚えがあるように、「負けて強くなれ」は将棋界において受け継がれてきた、そして、今なお使われる言葉である。大山十五世名人や加藤九段が活躍された昭和の時代より、「負けて強くなれ」という言葉に象徴される敗北から学び続ける姿勢は変わってないと言えるだろう。

一方、近年になって追加された考え方もある。近年における大棋士である羽生善治九段が二〇一一年に出版された岡田武史監督（当時）との対談本『勝負哲学』（サンマーク出版、二〇一一）での記述の内に、「負け方の美学」という言葉が登場する。これは単なる勝ち負けという枠組みを越えた、美的な判断が存在することを示す。岡田監督がマリーシア（サツカーにおいて相手の反則を取るために大きさに倒れるなど、痛みを受けたことを強調するようなプレー）を監督自身の美意識にはそぐわないプレーとして置くところから、羽生九段の将棋にも「負けどき」があり、いつ負けを認めるかが次の対局に密接に関わるという主張へと展開される（前掲書）。さらにこの本では、将棋には「中投げ」といつて中盤戦もしくは序盤戦で早々と差がついてしまった際にすぐに投げてしまうこと

や、逆転の目がなくなったとしてもひたすら最後まで粘り続けるようなこともあるが、こうした投了よりも、より「負けどき」で投了することが次の対局にいい影響を与え、また敗北のダメージを減らすことにも繋がると説かれている。この考え方は、一見、将棋のよくな、ある程度自分で負けのタイミングを決定できる敗北にしか繋がらないように見える。しかし、この見解が真に示していることとは、敗北をさとしたとしても次の敗北につながるための負け、同じ負けでも前を向いた負けを志すことである。あえて美学という言葉が使用されているのは、それが外的に着手の違いということで判断できる違いというよりも、その手がどのような思考経過で指されているのか、という内的な判断であることを示すものだろう。例え着手として同じ着手であっても、それがただ粘っているだけなのかそれとも次局に繋がるものなのかによって、どれだけ真剣に考えられるかは違うのだ。迷った末にどっちでもいいとランダムな決断をするよりも、思考に思考を重ねた末に決断するほうがいわば「美しく」決断していると言えるのだろう。

では、現代のタイトルを争う棋士達はどう考えているのだろうか。筆者と同世代の将棋棋士で興味深い見解を示しているのが佐藤天彦九段である。佐藤九段はより現実的な「敗

北との向き合い方」として、敗北してどうしても落ち沈む感情とは別の、論理的な視野を一つ持つておきバランスを取るのが佐藤九段のやり方だ、と述べている（『理想を現実にする力』、朝日新聞出版、二〇一七）。筆者の世代におけるある程度の共通認識として、棋士という競争を勝ち抜いてきて今なお仕事として将棋をやれている自分は幸せだ、というものがあるように感じている。現代においては、将棋棋士という職業は決して実力や才能だけでなれるものではない。実家の経済状況や、将棋棋士の育成機関である奨励会（現在は東京と大阪のみ）への距離、そして体調といった、クリアしなければならぬ前提条件がたくさん存在する。これらの条件を幸運にもすべてクリアし、今、プロの将棋棋士として勝負に臨んでいるだけでも十分に幸せなことなのである。この感覚にしたがえば、将棋棋士になつていれば、一局の敗北が痛切に胸に突き刺さつたとしても、他の視点から見れば、次の対局のチャンスが与えられているだけ幸せだ、ということになるだろう。こうした感覚は、おそらく私達の世代にプロ棋士を目指すものが多く、そしてそれゆえに棋士への道を諦めた、もしくは諦めずともなれなかつた同世代の友人を多く持つことになつてしまうことからくるものであろう。

また、同著にて佐藤九段は現代の勝負はク

リーンさが増し、フェアな競争という形になつたため、勝負を「楽しむ」ことが大事になつたと述べている。「楽しむ」という言葉が出てきた背景には時代の移り変わりがあつたの否めない。現代の将棋界に鑑みるに、かつての将棋界における生きるか死ぬか、何があつても相手を倒すといったような闘いよりも純粋にゲームとしての将棋を楽しむ観戦者のほうが増えたこともあり、勝負というより競技としての側面が増えてきたと言えるだろう。かつては戦術の一つと思われていた盤外戦術は今や闘志の現れとして賞賛されるのではなく、非難されるべきものとなつていく。かつては当然と思われていた、盤上でこれから戦う相手とは普段からも仲良くできない、というような言説はすでに時代とずれてきているように思われる。将棋界の若手も最近はそのよさが目立つが、そのみならず、最近ではスポーツなどの競技シーン、例えば野球やフィギュアスケートなどでも、今から戦う者同士が非常に仲よく接しているような光景をよく見かける。そうした勝負から競技へと移り変わる風潮から、かつては批判されていたような勝負を「楽しむ」といった表現が生まれてくるのだろうか。

ここまで、昭和から現在までの将棋界の「敗北に対する向き合い方」を見てきたが、「敗北を次の勝負に活かせるように」という

考え方は不変のものとして置かれているようだ。世代によって移り変わっているのは、勝負に対してどのように接するかではなくどのように勝敗以外のものを勝負に見るか、勝負以外の目標を持つ視点である。昭和の時代を過ごした名棋士達は勝負をただただ「真剣」に行うことこそが敗北を単なる痛みとしない方法だと考え、近年になると「美しい」という主観的判断によって敗北を昇華する思考となる。現代においては、さらに「楽しむ」という勝負とは直接に関係のない視点を導入することによって、勝負を行っている自身の視点から一旦脱却することが目指されている。時代によって勝負を取り巻く環境の違いがあり、またそれによる方法の違いこそあれど、いずれの時代も勝敗を味わう自分自身の視点から離れ、他の視点に拠つて見ることによつて中和することを目指している。現代、この「勝負」が少ない時代においては一つの敗北が大きな痛みとして降りかかってくることも多いのかもしれないが、将棋界が見出した解決策は、自分自身の痛みを離れ、違った視点から見るによりその痛みを和らげ、次の勝負に活かせるような材料にすることだと言えるだろう。

（いとだに「てつろう・棋士（八段）、元竜王」著書に、「僕らの哲学的対話棋士と哲学者」（戸谷洋志共著）など